

2005 フラッシュ・バック！

—ご存知ですか？ 愛媛県立図書館のさまざまな事業や取組—

昨年、創立 70 周年を迎えた県立図書館。今後も、県民の教養、調査研究及び地域文化の向上に資することを目指して、図書等資料の収集・整理・保存や館内利用・館外貸出を始め、レファレンス（調査・相談）資料の予約やリクエストの受付など、日々のサービスを充実させていきたいと考えています。

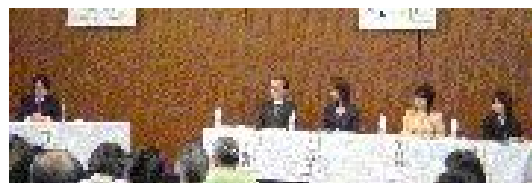
さて、今回は、県立図書館の普及啓発や読書活動推進などのあまり知られていない取組を紹介します。平成 17 年度の事業記録や参加者・関係者の声などから県立図書館の 1 年間を振り返ってみましょう。

（注） 9...当館報『読書えひめ』219 号、 0...同 220 号(本号)にその内容の詳細を掲載しています。

- 「子ども読書係」の新設（4/1～） 9、 0
- 子どもと本の出会い推進事業
 - ・親子で楽しむ読書教室（7～11 月、5 回）
親子読書の進め方等の実技指導（対象：幼児、小学生、保護者）
 - ・ブックトーク（4～11 月、6 回） 9
 - ・手作り紙芝居講座（1～3 月、3 回）
紙芝居普及者の養成。紙芝居の台本等の作り方等の指導（対象：一般、学校関係者等）
 - ・おはなし会（10～12 月、3 回） 9、 0
 - ・みんなで聞こう（講演会「恐竜のことをいろいろ考えてみる日」8/10） 9、 0
- 「巡回文庫」から「協力図書」へ（4/1～）
市町村合併で生まれた新市町が、自主的・自立的に図書館サービスを行うことができるようになるため、分館等を廃止し、これまでの巡回用自動車「いよじ号」による巡回配本から、宅配便によって各施設・学校等へ配本する方法に変更した。「いよじ号」は 43 年の歴史に幕をおろした。
- 貸出・返却等のシステムの電算化（4/19～）
コンピュータシステムの導入により利用者へのサービスの向上、業務の効率化等を図った。
- 第 47 回こどもの読書週間記念特別展示「こどものすがた」（4/23～5/29）
世界各国の子どもたちの生活、姿を写真や絵で紹介した本、また、愛媛の子どもたちの今昔が分かる本を展示した。
- 県立図書館 70 周年記念行事（5/14）
児童文学作家、古田足日氏^{ふるたたるひ}が木村研氏^{きむらけん}、佐伯美与子氏^{さいきみよこ}と対談し、児童文学について語った。 9
- 愛媛県読書グループ連絡協議会総会並びに読書推進大会（6/17） 9
- 県立図書館 70 周年記念事業（7～11 月）
図書館・本にまつわる作文やエッセー、読書感想文を募集し、優秀作品を表彰した。 0
- 恐竜であ・そ・ぼ（7/16～8/30）
堀之内にある図書館・博物館・美術館の 3 館が恐竜をテーマに共同企画した夏休みイベント 9

- 第 42 回愛媛県図書館講習会（8/19） 9
- 特別展「糸瓜忌や」（9/10～10/21）
子規と子規に縁ある人々の書画の紹介
- 「文字・活字文化の日」制定記念シンポジウム（10/27）
「読書ではぐくむ言葉の力、豊かな心～確かな言語力を育てるために～」をテーマに、愛媛大学 三浦和尚^{みつらこうし}教授をコーディネーターに、小松温芳図書館 石丸敏^{いしまるとし}信館長、松山市立味酒小学校 上 甲教孝^{じょうこうこう}教諭、宇和島市立岩松公民館 岡村玲子^{おかむられいこ}司書、県立伊予高校生徒寺田栄理^{てらだまり}さんによるパネルディスカッション形式の意見交換を行った。

（寺田さんの話）学校図書館は情報の発信地であると同時に、学校のすべての文化活動の中心になるようにしたい。紙に墨で書いた書物は千年前のものでもちゃんと読める。本は最高の文化の伝承手段、この先も残っていくに違いない」



「文字・活字文化の日」制定記念シンポジウム

- 第 59 回読書週間記念特別展示「県立図書館『もの』語り」（10/29～11/29）
なつかしい小物や風景写真を始め、図書や地図など、県立図書館だからこそ遺すことができる様々な「もの」を紹介した。
- 愛媛県立図書館協議会（11/9）
愛媛大学教授 三浦和尚氏が会長に就任した。○県読書活動研究大会・地区集会（11/18） 0
- ブックトーク＆メディカルトーク（11/24）
「命」をテーマに県立松山西中 3 年生の皆さんへ。県立医療技術大学図書館との共同企画 0
- 特別展「『坊っちゃん』誕生 100 年」（12～1月）
自筆原稿（復刻）掲載された雑誌『ホトトギス』あらすじなどを展示し、松山に縁の深い『坊っちゃん』

の世界を紹介する。

○やりがいのあるボランティア活動へ(8月～)

ボランティアの方々が、各自の得意分野において充実した活動が可能になるよう活動内容を拡大した。登録者数は現在 12 名(H18. 1 月末)。皆「県民のために役立ちたい」という高い志を胸に、書架・書庫整理や新聞・古文書・特別コレクション等の資料保存、土地台帳等の保存・閲覧のためのデータ作成などに熱心に取り組んでいる。

(ボランティアの方々の話)「土地台帳のデータ化は、資料を後世に伝えるという意味で重要な仕事。図書館は本の貸出しだけでなく、いろいろな仕事をしていることが分かった」「書庫に所狭しと本が置いてあることに感心した。蔵書がこんなにあることを県民にもっと知らせる必要があるのでは」「自分には裏方の仕事が向いている。職員からあいさつされ、仕事内容について丁寧に教えてもらい充実感を感じる」(12/14 懇談会より)

○中学生への図書館業務体験指導(9～2月)

近年、中学校から職場体験学習の希望申込が急増しており、県立図書館はそのニーズに応えてきた。カウンター実習、資料の受入れ・発注、配架作業、

レファレンス実習などを行った。

(参加した中学生の話)「今まで知らなかった図書館の仕組みや苦勞が分かり、とてもよい体験になった。それと同時に、人のために細かい仕事をするこの大変さと楽しさを知ることができた」

○童話の会(4、6、11月の年3回)

県立保育専門学校生が人形劇、紙芝居、口演童話等の読み聞かせを行い、幼児の童話への関心を育てる。

○ストーリーテリング～お話を聞く会～

(8月を除く毎月第2土曜日、11回)

「松山おはなしの会」が子ども(幼児、小学生低学年)保護者に読み聞かせを行い、親子読書への関心を育て、普及を促進する。

○古文書解読講座(毎月第4日曜日、12回)

郷土資料をテキストに古文書を解読し、当時の時代背景を学習する。郷土史家が指導者を務める。

(受講者の話)「古文書と言うと、古臭いなどと思われがちだが、決してそうではなく、毎回新しい発見や面白さがある。正に温故知新で、今につながり、今に生きる『大きな流れ』が感じられる」

愛媛県読書グループ連絡協議会だより

平成 17 年度「第 42 回愛媛県読書活動研究大会・地区集会」が 11 月 18 日(金)、内子町の内子自治センターで開催され、県下各地より読書教育関係者、読書グループ関係者等 224 名が集った。

開会式後の表彰式では、東温市の「『名の無い』読書会」が、40 年に及ぶ地道な読書活動の推進が認められ、全国優良読書グループとして社団法人読書推進運動協議会から表彰された。また、愛媛県立図書館 70 周年記念事業「作文・エッセー、読書感想文募集」の入賞者の発表及び最



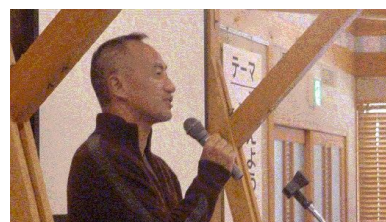
優秀賞者の表彰が行われた(P6～8 参照)。

今大会の新しい取組として、参加者が八つの分散会に分かれ、大会テーマ「伝えよう読書のよこび、広げよう感動の輪」の下、自由に意見・情報交換を行った。この少人数形式が奏功し、読書の楽しさ、読書活動の推進、さらには、県読書グループ連絡協議会の今後の方向性などについて活発で有意義な話し合いが各分散会で展開され

た。午後は、文筆家^{しゃ たかひろ}の謝孝浩先生を招き、「日本の

原風景を想う『ヒマラヤのなつかしい谷スピティ』と題した講演会を行った。現地に何年も足を運ばれ、風景や人々に深くかかわってこられた氏の実感のこもった体験談や、70 枚ものエネルギーなスライド映写には、ドキュメンタリーならではの胸に強く迫ってくるものがあった。厳しい自然の中でも、家族や隣人と共にひっそりと暮らす人々や、谷の四季折々が織り成す多種多様の表情を参加者は目の当たりにして、実際にスピティに旅立ったような楽しい心地になった。

「風景とは、人々の生活が見える場所がたくさんあるところであり、そこに当たり前のように展開される温かい人間関係、それがスピティのなつかしさ、心地よさで



ある」...スピティへの愛情あふれる説明に、つい忘れがちな「日本の原風景」というものを大変興味深く

学ぶことができた。

愛媛県立図書館70周年記念事業「作文・エッセー、読書感想文 募集」入選者一覧

平成 17 年度は、愛媛県立図書館の創立 70 周年を記念して、図書館・本にまつわる作文やエッセー、読書感想文を募集しました。6 部門で合計 612 点のご応募ありがとうございました。審査の結果、下記のように入選者が決まりましたのでお知らせします。なお、最優秀受賞者 6 名には、愛媛新聞社賞が贈られました。

《小学生・低学年（1、2 年）の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 4 点（応募数 79 点）

賞	氏 名	学 校 名	学年	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	久保田 晶子	大洲市立喜多小	1	ともだちでできてよかったね 『にじいろのさかな』（マカス・フィスター）
優 秀	伊賀 千環	八幡浜市立川上小	2	読書、大すき <作文・エッセー>
佳 作	樽岡 愛	内子町立大瀬小	1	みんな やさしいね 『やさしいね!』（メアリー・マーフィ）
	久保 楓	大洲市立正山小	1	おひさまばん 『おひさまパン』（エリサ・クレヴェン）
	薬師神 昂輝	八幡浜市立双岩小	2	アリさんへ 『アリからみると』（桑原隆一）
	嶋家 佑太	八幡浜市立川上小	2	おかあさん、ありがとう 『のえんどうと 100 人のこどもたち』（甲斐信枝）

《小学生・中学年（3、4 年）の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 4 点（応募数 86 点）

賞	氏 名	学 校 名	学年	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	高本 明日香	内子町立内子小	3	しぜんの大切さを教えてくれた本（作文・エッセー、『みかん畑は生き物の国』）
優 秀	稲田 菜摘	大洲市立正山小	4	『スズメの大研究』（国松俊英）を読んで
佳 作	田坂 花	西条市立神拝小	4	図書室の中心で「ない!」とさけぶ <作文・エッセー>
	藤澤 千帆	内子町立御被小	3	お母さんの思い出とホテル 『とべないホテル』（小沢昭巳）
	井上 侑香	大洲市立喜多小	3	川は生きている! 『かわはながれる かわははこぶ』（かこさとし）
	大野 あゆみ	大洲市立喜多小	4	『いのちのひまわり』（綾野まさる）を読んで

《小学生・高学年（5、6 年）の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 4 点（応募数 85 点）

賞	氏 名	学 校 名	学年	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	鎌田 明宏	内子町立程内小	6	大地震にぼくは負けない 『震度 7』（松岡達英）
優 秀	東影 喜子	内子町立程内小	5	いのちを育む村 『アレクセイと泉のはなし』（本橋成一）
佳 作	坪内 綾乃	伊予市立伊予小	6	読書という友達 <作文・エッセー>
	富岡 紘平	内子町立小田小	5	つかさとおとめに教えられたこと 『空のてっぺん 銀色の風』（ひろはたえりこ）
	米田 早紀	内子町立立川小	6	『歩きだす夏』（今井恭子）を読んで
	宮本 佳祐	内子町立石畳小	6	共に生きる 『ぼくらはみんな生きている 都市動物観察記』（佐々木洋）

《中学生の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 5 点（応募数 280 点）

賞	氏 名	学 校 名	学年	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	木村 美月	松山市立城西中	2	夢を追う 『アインシュタイン 16 歳の夢』（戸田盛和）
優 秀	松浦 有希	県立宇和島南中	1	『かぎりなくやさしい花々』（星野富弘）を読んで
佳 作	神野 未来	新居浜市立川東中	1	『鼻』（芥川龍之介）を読んで
	槇 江里子	今治市立日吉中	3	魔女は、教えてくれた 『西の魔女が死んだ』（梨木香歩）
	後藤 優子	済美平成中	2	神という名の海、罪という名の毒薬 『海と毒薬』（遠藤周作）
	渡部 佳奈子	松前町立北伊予中	2	自分を変えてくれたもの <作文・エッセー>
	濱田 薫	県立宇和島南中	3	『秘密の道をぬけて』（ロニー・ショッター）を読んで

《高校生生の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 3 点（応募数 61 点）

賞	氏 名	学 校 名	学年	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	宮岡 希実	県立大洲高	2	『変身』（フランツ・カフカ）を読んで
優 秀	槇 利衣	県立今治西高	1	『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』（山本敏晴）を読んで
佳 作	中岡 志保	県立松山東高	1	彼女たちに出会って 『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』（山本敏晴）
	宮川 なつき	県立松山東高	2	『飼育』から垣間見る戦争 『飼育』（大江健三郎）
	菅 幸奈	県立今治北高	3	『蹴りたい背中』（綿矢りさ）を読んで

《大学生、一般の部》 最優秀 1 点、優秀 1 点、佳作 2 点（応募数 21 点）

賞	氏 名	住 所	作 品 の 題 名、種 別、書 名（著 者）等
最優秀	鈴木 久仁子	四国中央市金生町	「三浦綾子」力 <エッセー>
優 秀	渡部 孝雄	松山市久万ノ台	点字が開いた道 <エッセー>
佳 作	渡部 久子	松山市立花	子どもの本と関わって <エッセー>
	岡田 悦子	松山市三津	本 <エッセー（随筆）>

《中学生の部 最優秀》 夢を追う

松山市立城西中学校 2年 木村 美月

夢とはぼんやりたゆたうものではない。ひたすら追うもの、希求するものだ。アインシュタインは、十六歳のとき「もしも光速で光の波を追いかけたら、光の波は静止して見えるだろうか。まさかそのようなことがおこるとは思えない。」という疑問を持った。そうしてその直感をずっと信じ続けた。私がこの本から学んだ最大の力は、アインシュタインの一途さだ。十年後に夢から覚醒するかのようにもたらされた大発見は、彼の探究心と情熱のたまものだ。そうしてその人間性は、成功をもたらし要因となったものを彼の元にひきつけたのだ。

アールウの時代。アインシュタイン十六歳の年にまず大切な人との出会いがある。ひとりは模範的な秀才グロスマンだ。アインシュタインは秀才の条件に「理解できる力・能力を集中する熱意・綿密にまとめあげるためのきちようめんさ」を挙げ、自分にはどれも欠けていたと述べている。アインシュタインが世に言う秀才ではなかったことは、あまりにも有名な話だ。それをなんと、彼は早くから自覚していたのだ。彼はグロスマンと語り合った事で自分らしい探求の方法を見出した。

二人目は親友ベッソーである。アインシュタインがよりよき自問自答を続けることができたのは、彼のおかげだった。同じ特許局の職員となって、いつもアインシュタインの考えを深めひろげる手助けをした。私も数学の難問に挑んでみたとき、友人に説明をすることで考えが進んだ体験がある。このことは、考えが閃いたとき、それを文章に書き起こしてみると客観的に見られることに似ている。

今一つの成功の要因は、特許局という最適の「隠れ家」だ。ここは大学のように研究の成果を急がせることはなかった。「学术论文の生産は、底の浅い研究を強いられる事」とアインシュタインは警戒し、特許局での研究の時間を懐かしんでいる。

考えてみれば私たちの勉強は、いつも結果を出すことを迫られている。授業のあとのテスト。一年のカリキュラムを消化できたか否か。卒業のための単位修得。しかも、それらをまんべんなくできるように望まれる。個性のある生徒がいいと言われるのに、成績表には各教科の評定が並ぶのだからひどく矛盾している。そう言いつつも、私たちは良い数字を並べようとする。自分を見失いそうになる。

歴史をふりかえると、舌を巻くような偉人は、いつもかなり過去の人だ。昔の人のほうが頭がよかったのかと思ったけれど、じつは一つのことひたむ

きになった環境のせいだったのではないかと思う。スペシャリストでなくてはならないのだ。なんでもある程度できるということに、夢は持てない。

そうしてなによりも肝心なのはアインシュタインの個性だった。彼は、暗記は苦手で、物事を不思議と感じて独学するのが好きで、根気と粘り強さがあったという。

「アインシュタインは古典的な原理に執着せず、すみやかにあらゆる可能性を頭に描き出す。そしてただちに実験によって検証されるような新しい現象を予想する。」

「直感的に不自然を感じていた。固定観念に毒されず、矛盾がよく見えた。」

ここが、私の頭をガツンとたたいてきたところだ。納得上手になってはいけないのだ。物理学の言葉を使って表現すれば、現象を摩擦なく受け止める溶媒になってはいけないということだ。常に異質を感じることが必要なのだ。知りたいことの答がいつもそこにあるとは限らないと思うべきなのに、私の勉強は受け身になりがちだ。だからこそ、どうしてもわからないという境地に出会いたい。矛盾による驚きが発見になる。アインシュタインの大発見はベッソーと語り合った次の朝、突然壮大なジグソーパズルが完成されたときのように瞬間的におとずれた。

「修正すべきはニュートン力学の方だ。」

これはきっぱりと矛盾と向き合う行為だ。正しい答えとは求めるのではなく、導かなくてはならない。自分で見つけるのだ。

私もある疑問を育てている。エネルギーのバランスのことだ。小学校のときに環境問題を学んで以来、自然エネルギー、太陽の力に興味を持ち続けてきた。資源を浪費しない画期的な技術だと思った。やがてエネルギーの変換にある程度のロスが出ることを勉強してからは、そのムダを究極になくしていく研究に関心を持っている。すべてのバランスがとれた世界は、エネルギー効率が最高の状態になるのに違いない。力の追究は、自然界の重力、電磁力、核力の関係の探求、自然力の統一という物理学の基礎的な問いの一つであるらしい。力は生きる力につながる。私は矛盾と向き合うまで疑問をつなぎ続ける。

私は器用には泳がない。何でもうまくできる生徒になることが目標ではない。けれども必ず対岸を目指し泳ぎ着く。いちばん得意な息継ぎでひたむきに水をかいて岸を目指す。

(『アインシュタイン 16歳の夢』戸田盛和著、岩波書店)

《小学生・高学年の部 最優秀》 大地震にぼくは負けない

内子町立程内小学校 6年 鎌田 明宏

ドーン。ガタガタ。ガシャー。突き上げるようなゆれ、激しい衝撃。まるで四角いカンの中でゆすられているドロップのような感じ。これが作者が実際に体験した中越地震だ。ぼくは、立っていられなくなって転んだりぶつかったりして血だらけになった家族と自分を想像して、こわくなった。

川口町は豊かな自然に囲まれた山の中の小さな町だ。山や川の自然の様子がとても程内と似ている。困っている人を思いやり助け合う優しい心をもった人々の住んでいるところだ。そんな町に何の前触れもなく中越地震が襲いかかった。町は地震によって道路が切断され、救援物資を運び入れることも、そこから脱出することもできない。まさに「陸の孤島」と化した。ぼくたちの地域も、もうすぐ南海地震がくるのではないかとおそれられている。ぼくは、川口町と程内を重ねて考えた。

本当に、大地震がきたら、どうになってしまうのだろう。この本を家に持って帰って家族で読んだ。地震マニュアルで非常持ち出し品を確認した。家の中の家具を器具で固定したり、家族がばらばらになった時の集合場所や連絡方法を話し合ったりした。いつ起こるか分からない地震に対して十分に備えをしておくことは大切だと思った。しかし、いざ大地震が起こってしまうと、家、車、電気、水道等人間が作った物はすべて破壊される可能性が高い。それらに頼って生活しているぼくたちは、どうやって生きていくのだろう。

川口町の人々を、支えて元気づけたのは、避難所の仲間や、ボランティアの人たちだった。「地震は、今までに築き上げてきたものを奪っていったが、他人を思いやることの大切さや自然とともに生きる人の強さを教えてくれた。」と被災した人々は口をそろえて言っている。人間は強い。家が壊れ、苦しい暮らしが続いても、人のあたたかい気持ちが伝わってくれば、困難を乗り越えることができるのだ。山が崩れ、地面が割れても自然は必ずよみがえり、季節がくれば木々は芽吹き草花は花を咲かせるのだ。

ぼくは、大きな災害にあったときぼくたちを助けてくれるのは、人間同士の思いやりやあたたかい心や、自然の力だと思う。この本を読んで、ぼくは今年「無人島キャンプ」に参加することにした。この体験が災害時の生活にきっと役に立つと思ったからだ。実際水道や電気がないのはつらかった。暗くなったらテントで眠り、明るくなったら活動開始という生活のリズムに体がついていかず眠れない日が続いた。班の仲間がいなかったらたえられなかっただろう。ガスや電気がなくても島の自然を利用して、料理を作ったり洗濯をしたり、食器を作ったりして生活する方法も身につけることができた。ぼくは今まで多くの人に支えられ助けられてばかりだった。でも、ここでの体験で少しは人を助けることができるようになったのではないかなと思う。この本と、無人島キャンプの仲間感謝したい。

(『震度7』松岡達英著、ポプラ社)

すべての最優秀賞、優秀賞作品をご覧になりたい方は、県立図書館 普及係までご連絡ください。県立図書館のホームページにも掲載中です。